

## 文化財調査(中間報告)について

### 1、生振勢至観音堂について

生振勢至観音堂(おやふるせいしかんのんどう)は、石狩市生振 348-7 に所在する寺院で、本尊は勢至観音、創立は1922(大正11)年である。

1922(大正11)年の4月27日に生振で農業を営んでいた中田伊佐次郎(なかたいさじろう)とその父庄次郎の夢枕に勢至観音合力佛(一佛)が立った。これ以来、伊佐次郎は靈感をもって眼病・結核等万病を治し、話を伝え聞いて道内のみならず樺太からも治療(祈祷)を望む人々が訪れ、境内に2軒の宿泊施設が建てられるほどであった。現本堂は1931(昭和6)年に再建され、その時に伊佐次郎の木像も作られた。伊佐次郎は戦後間もなく他界したが、全道に30をこえる観音講が設立されており、現在も信者が少なくないことから、伊佐次郎の孫である中田守氏により4月27日、8月27日にお祭りが行われている。

本堂には「開基聖人中田伊佐次郎木像」があり、中田氏の自宅には「馬の絵馬」が保存されている。

### 2、開基聖人中田伊佐次郎木像

#### (1)概要：

1949(昭和24)年に開眼式を行った開基聖人中田伊佐次郎の木像。和装で正座した中田伊佐次郎が写実的に表現されている。木造の製作は、二代目高村晴雲である。木像の製作にあたっては、当時北海道栗山町にいた高村光太郎\*1(初代高村東雲\*2の甥)に相談し、二代目高村晴雲に依頼したとされる。この二代目高村晴雲は、幕末の名仏師として知られる高村東雲から五代目にあたる。

なお初代晴雲(東雲から三代目)の製作した観音像は登別市指定文化財に指定されている。

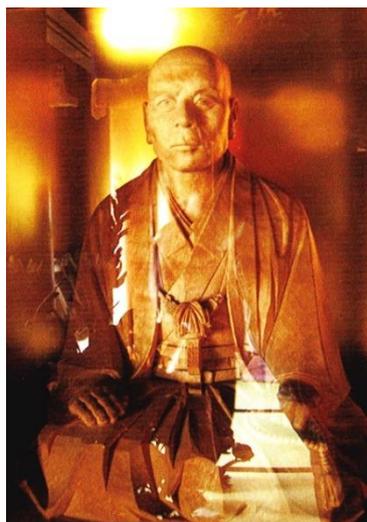
※文献資料に基づく調査のため、今後の追加調査によって更新されることが考えられます。

\*1 高村光太郎：1883(明治16)～1956(昭和31)。詩人、彫刻家。彫刻と洋画を学ぶ一方、短歌を発表した。『道程』『智恵子抄』ほか。

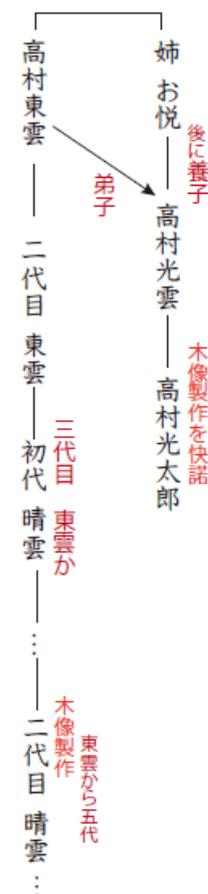
\*2 初代高村東雲：幕末から明治初期に活躍した仏師。

#### 参考文献

国立国会図書館 近代日本時の肖像 高村光太郎 <https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/6254/>



高村東雲系図



## (2)まとめ

本木像を市指定文化財候補とするうえで検討すべき点が3点存在する。

### ① 木像の対象

1点目は、木像として残されている人物が生振勢至観音堂の開基聖人中田伊佐次郎という点である。人物を扱った像が文化財として扱われることは、決して珍しいことではない。しかし、人物が所属した集団や組織、宗教を文化財としての価値と結びつけることには慎重な態度が求められる。既に述べたように、生振勢至観音は既存の神道・仏教から創立された訳ではなく、この地域で発祥し、現代まで続いている「民間信仰（新興宗教）」に該当する。検討対象となっている木像は、「民間信仰」の開祖がどのような霊的な影響力を持っていたかということではなく、あくまでも1920年代の北海道の石狩の生振という農村で生まれた地域信仰に関わる民俗・歴史資料としての価値を検討すべきであろう。

### ② 製作者

2点目は、仏師として名の知られる高村東雲の系譜にある高村光太郎と二代目晴雲が製作に携わったとされる点である。同門の三代目東雲の観音像は登別市で美術工芸品として市指定文化財となっており、本像についても彫刻家・詩人等で知られる高村光太郎が関わったとされる。その経緯には不詳となっている点がいくつかあり、確認が必要である。その上で、このような高村東雲一門の関りが、本像の市指定文化財指定に関わるかどうか美術工芸史の観点から専門家の評価が望まれる。

### ③ 美術工芸品としての価値

もっとも重要な木造の美術工芸品としての価値である。名工と呼ばれる物資を輩出した高村一門に連なる晴雲の作であるとしても、美術工芸の面で果たしてどのような評価がなされるものなのか。これも専門家による評価が必要となる。

## 3、馬の絵馬(写真別紙)

(1)名称：絵馬および写真

(2)点数：(絵馬)馬180点、牛7点、額入りの馬1点

(写真)馬58点、牛1点、猫1点、狸1点 等

(3)内訳：(地域)空知34点、網走28点、十勝24点、石狩20点、上川132点、他道内全域

(4)概要：

奉納者(動物等の飼い主)によって描かれたと思われる絵馬。

中田伊佐次郎(生振勢至観音)に対してけがや病気からの回復祈願、あるいは祈願のお礼として奉納されたもの。動物の絵に加え「奉納」や馬の特徴(栗毛などの毛の特徴)や年齢、奉納者、日付等が記載されている。

# 絵馬奉納



林玄(12歳)  
砂川町

ここに紹介する絵馬の一群は、観音堂日本堂の木箱に収められていた。埃をかぶった覆いをはぐると多くは画用紙に描かれたものが積み重なっていた。

一般に絵馬といえは、神社や寺院などに祈願や報酬のために図を描いて奉納する絵をい、多くは板に描かれている。描かれているのは必ずしも馬とは限らない。絵馬の歴史は古く奈良時代の遺跡からも出土したことが知られている。絵馬には大別して専門絵師による額形式の大絵馬と奉納者自身が描いた小絵馬がある。

リングの木箱から出てきた絵馬の分類を進めていくと、紙に描かれた馬が一〇枚、牛が七枚。額に納められた馬が一点。この他、馬の写真が五八枚、牛が一枚、変わったところでは猫とタヌキがそれぞれ一枚、馬の胃のレントゲン写真もあった。

いずれの絵馬も奉納者自身によって描かれたと思われる。馬は重要な家族の一員であったと感じさせる筆づかいで、精確な観察に基づいて描かれている。馬に生活を頼り委ねる場合が多かった北海道の農業者の飼育馬に対する切実な祈願の証といえるだろう。同時に中田伊佐次郎氏と生振勢至観音に対する信者・崇敬者の絶対的な信頼の強さを感じさせる。飼育馬の安全、けがや病気からの回復祈願、あるいは祈願成就のお礼として奉納された絵馬の種類の多様さは、馬信仰習俗の面からも貴重な生活遺産と言えるだろう。

絵馬の奉納年月日で最も古いものは大正十四(一九二五)年で、軍馬として奉納されたものも含まれているのか昭和十年代が最も多く困難であった時代を反映している。

また奉納者の住所からは、最も遠くは樺太恵須取町からの青毛の八歳馬であることが分かった。住所が記載されている一四六枚の絵馬で最も多かったのは空知管内からの三四枚であった。このほか北海道内では、網走管内の二八頭が続き、十勝管内二四頭、石狩管内二〇頭、上川管内二三頭と続く。遠く斜里郡や根室郡からも奉納されていてほぼ北海道内全域にわたる。

馬の品種を外貌と能力で分けると、西洋種で軽種(乗馬用)は、アラブ種、サラブレッド種、アングロアラブ種。中間種(農耕用)はアングロ・ノルマン種、トロッター種。重種(重粘土地用、重量物運搬、ばんば競投用)はベルシエロン種(大型と小型の馬がある)。馬の毛色別では、鹿毛、栗毛、青毛、柳毛など。

馬の故障では、歯と蹄に十分注意が必要で、病気では骨軟症(電国に多い)、伝染性貧血、疝痛、皮膚病、日本脳炎などがある。石狩市生振、花畔は古くから名産馬の産地として知られ全道畜産共進会で最高位をたびたび受賞している。

次ページからの一覧には絵馬に書かれていた項目を「名前」、「特徴」、「年齢」、「住所」、「奉納者」の順に記した。

(田中實・小堀吉味男記)



北一号(栗毛・3歳)富良野町 戸城一市



北流号(栗毛・5歳)浦幌村 山尾章



(12歳)小室晴



(青毛9歳)



西川運号(化・黒鹿毛)



(5歳)



至勝号(栗毛・6歳)上富良野村 高野菊次郎



(栗毛・8歳)浦幌村 菅野留太郎



記載なし



春花号(化・鹿毛・14歳)名寄町 浦谷長男



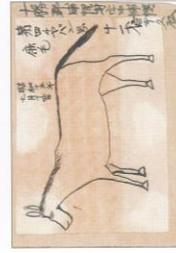
林二号(栗毛・5歳)当別村 川原常次郎



昭月号(栗毛・9歳)鷹栖村 坂田重二



春久号 弟子屈村 斉藤ウメノ



第四チャパン号(栗毛・11歳)浦幌村 宮本久光



戴勝号(栗毛・7歳)山部村 高田正重

## (5)まとめ：

神社などに願いを込めた絵馬を奉納することは、広く行われている習俗であるが、対象を描いた絵馬を通じてその病気、ケガの回復を祈願するというのはあまり例が無い。中田伊佐次郎が創始した地域信仰（新興宗教）の特徴のひとつと言える。

その背景には、明治から昭和30年代までの機械化以前の農業において、牛馬の力に依存する割合が非常に大きく、牛馬の回復は人々にとって生活を支える基盤であったことが考えられる。その中で、家畜の平癒を願う絵馬が石狩管内のみならず道内各地、遠い地域では樺太からも奉納されていることから、中田伊佐次郎に対する期待と馬を中心とする家畜の重要性の大きさが推測できる。

これらの絵馬については、専門的な美術教育を受けていない、いわば農業を営むふつうの人々によって描かれたものである。そのため検討すべきは、美術工芸品としての価値ではなく、これらが生振勢至観音堂に奉納された経緯と心象、そして当時の人々の生活の背景を反映する歴史・民俗資料としての価値であると考えられる。

これらの絵馬は、石狩市だけでなく北海道でとして生振勢至観音堂が人々の生活の中で大きな影響力を持っていたことを示しており、当時の地域信仰(新興宗教)の特性を表す資料として検討に値すると考える。また、当時の農家にとって家畜、特に馬が非常に重要な存在であったことを示す資料としても注目される。

## 参考文献

中田 守 2019 『生振勢至観音堂沿革誌 1922-2019』（非売品）

※写真等はすべて上記資料より引用

